

A-1-1 図面の準備

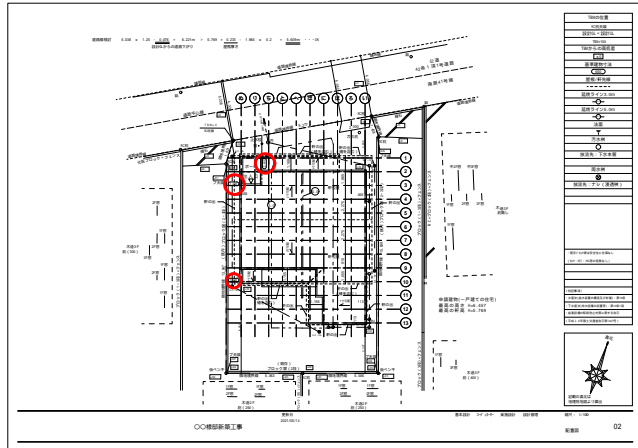
配置図、基礎伏図、基礎断面図を用意します。

配置図

配置図には建物の配置、建物の高さ、外部配管の敷設ルート、延焼ラインの範囲など、多くの情報が書かれた図面です。目的の配置寸法を間違えないように、しっかりと確認してきます。

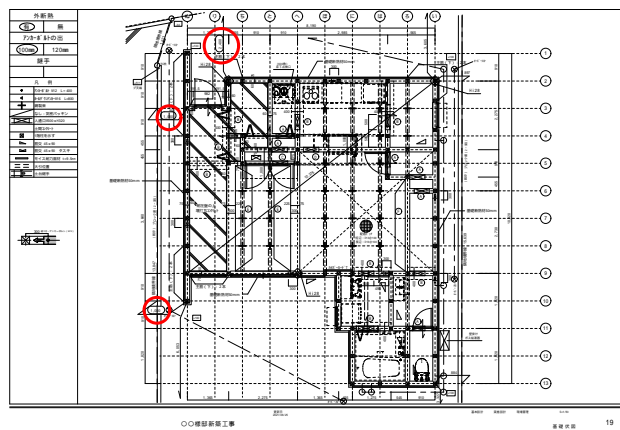
建物の配置基準と呼ばれる規準となる寸法が記載されていますので、その寸法はどこから始まるのか、建物と敷地の関係を確認します。（右の図では赤丸）

重要な事項なので、どこが配置基準かが曖昧な場合は設計者又は工事監理者と事前に協議をする事。



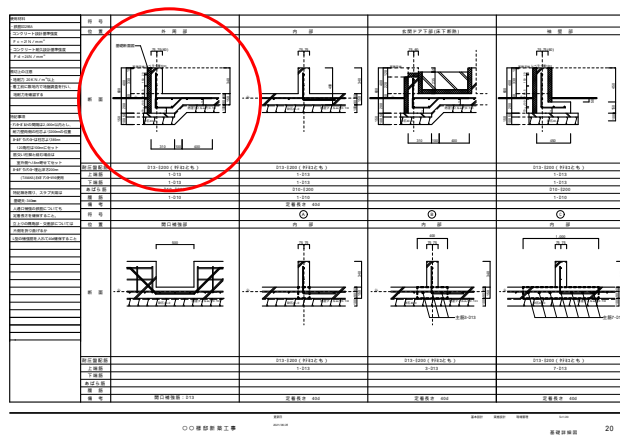
基礎伏図

基礎伏図は基礎コンクリートの設計図です。他にも土台継手位置や木造部分の情報や設備配管情報なども記載されています。配置図よりも具体的な基礎形状を把握しながら、建物配置寸法を確認します。



基礎断面図

基礎断面図は基礎コンクリートの断面詳細図です。基礎コンクリートの根入れ、基礎断熱材の有無などを確認していきます。

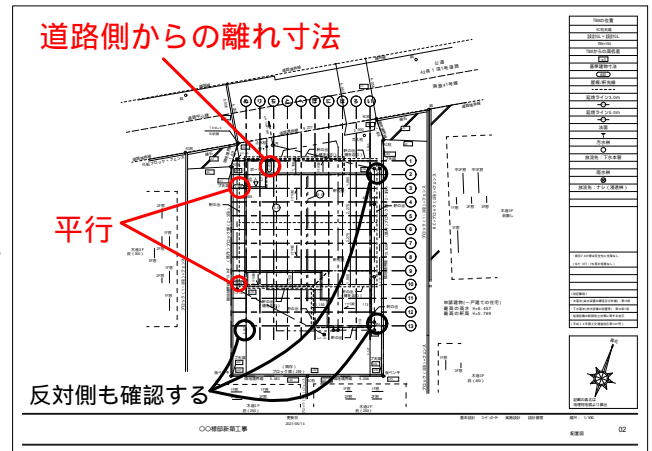


A-1-2 建物の配置の確認

配置図における配置の確認と建物の設計G Lの確認を行います。

配置図に書かれた配置基準寸法を確認します。
右の配置図では、赤丸の部分が配置基準寸法になります。西側隣地境界線からの配置寸法が同じ数字ですので、西側隣地境界線から平行である事がわかります。

次に、北側道路境界線からの離れ寸法を確認します。
この時、必ず反対側の寸法も配置図と合っているかを確認します。



A-1-3 建物の設計G Lの確認

建物の高さの基準である設計G Lの確認を行います。

配置同様に、高さの基準である設計G LとT B M（ベンチマーク）の関係を図面の凡例により確認します。

配置図に設計G LとTBMの関係が示されていない場合は必ず設計者又は工事監理者に確認をしてください。

右の凡例では、設計G LはTBMより100mm高い事がわかります。

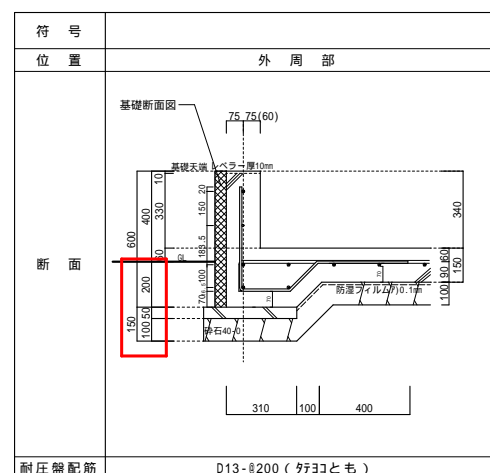
TBMの位置
RC杭天端
設計GL
TBM+100
TBMからの高低差
±0
基準建物寸法
650
屋根/軒先線

A-1-4 根切り底の高さの確認

基礎コンクリートの根切り底の高さを確認します。

基礎断面詳細図を見て、設計G Lから砕石下端までの高さ寸法を確認します。

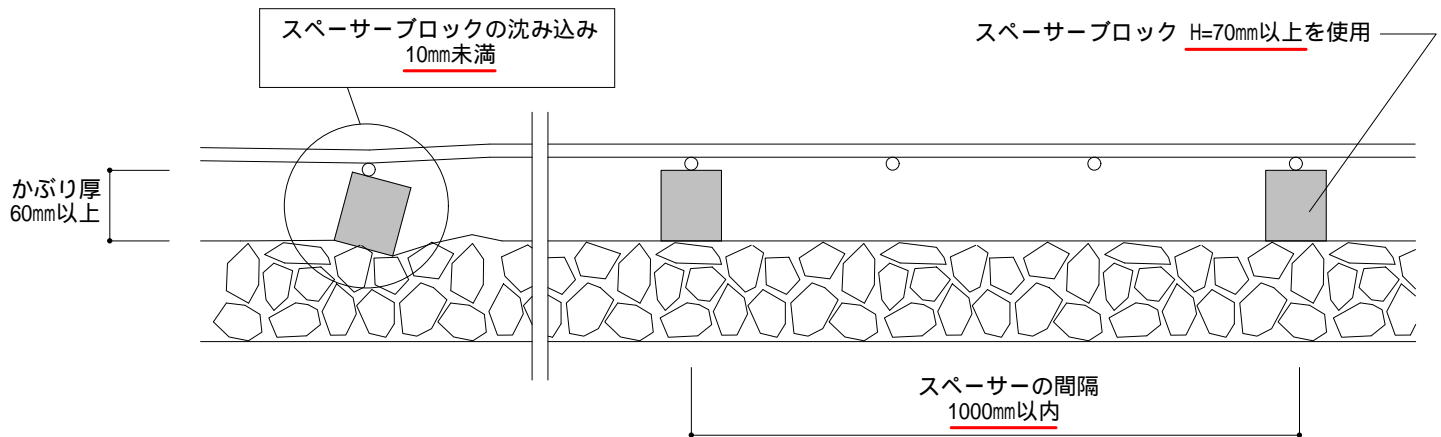
右の図では、 $200+150=350\text{mm}$ が根切り底である事がわかります。



B-2-3 転圧の施工状態

プレートコンパクター等により転圧を十分にいき、スペーサーブロックの沈み込みが10mm以上生じないようにする。

スペーサーブロックは、H=70mm以上を使用する。

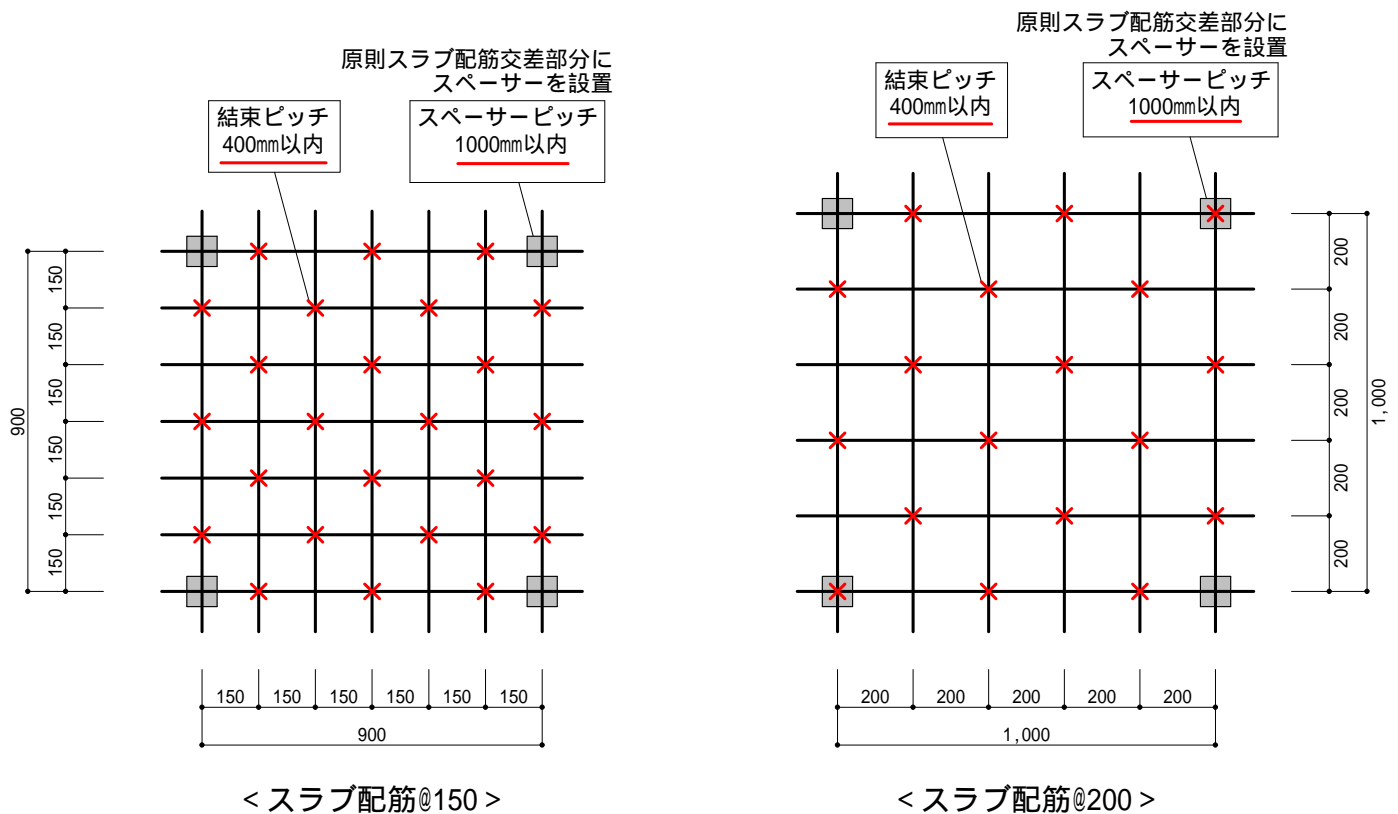


B-3-3 スペーサーピッチの確認

スペーサーのピッチは、1000mm以内とする。

B-3-4 スラブ配筋結束ピッチの確認

スラブ配筋結束のピッチは、400mm以内、かつ千鳥施工とする。



D-2-3 コンクリートのジャンカ確認

骨材が 100mm 以上にわたり表面に現れている場合は補修対象とする。

(例：ポリマーセメントモルタルなどを塗布し補修する。)

D-2-4 コンクリートのクラック確認

0.5mm 以上のクラックは補修対象とする。

(例：ウレタン系かシリコン系のシーリング材充填補修する。)

D-2-5 コンクリートの欠け確認

30mm 以上の欠けは補修対象とする。

D-2-6 セパレーター処理の確認

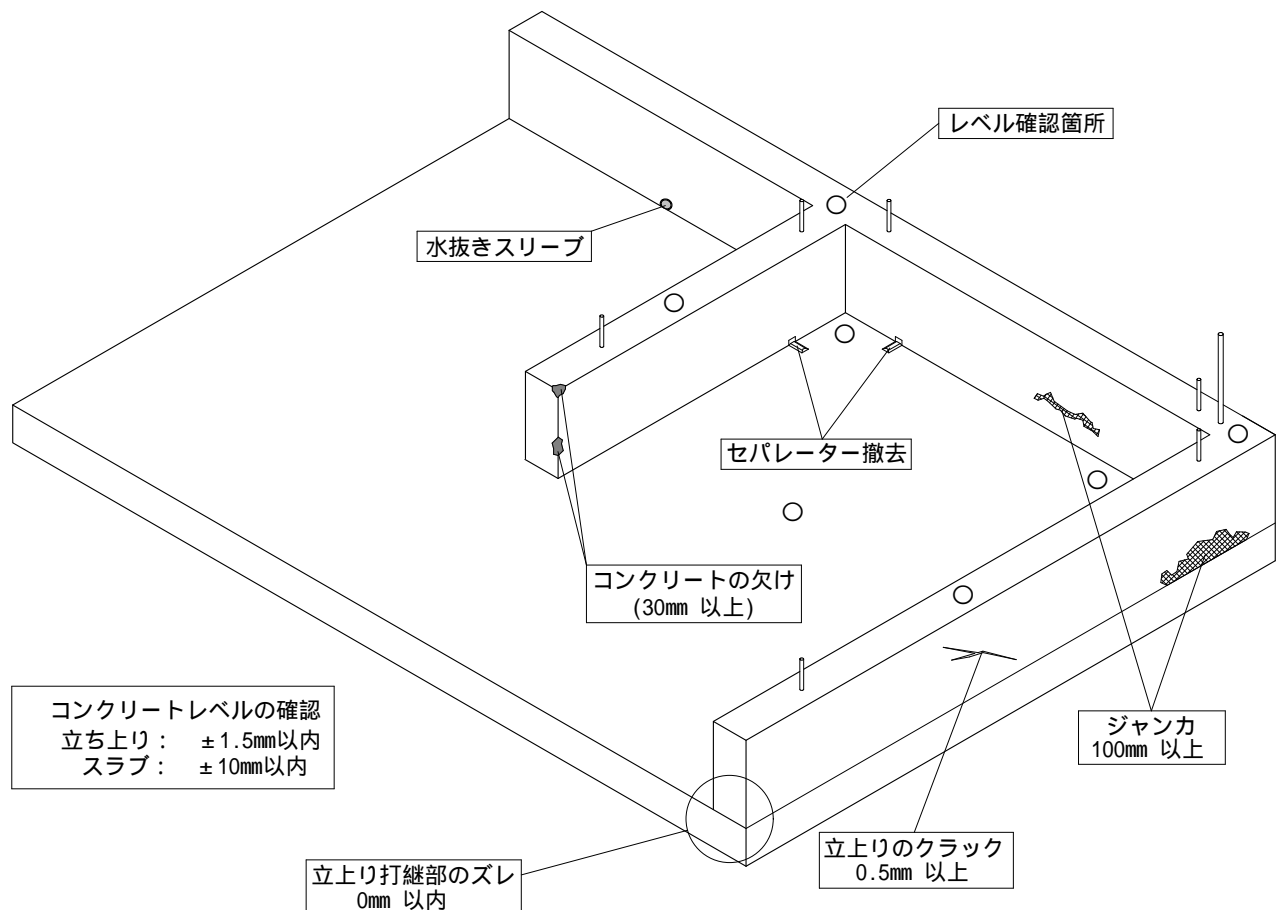
すべてのセパレーターが撤去されているか確認する。

D-2-7 立上り打継部の確認

底盤と立上り打ち継ぎ部のズレは、0mm 以内とする。

D-2-8 水抜きスリーブの確認

水抜きスリーブが設置されているか確認する。

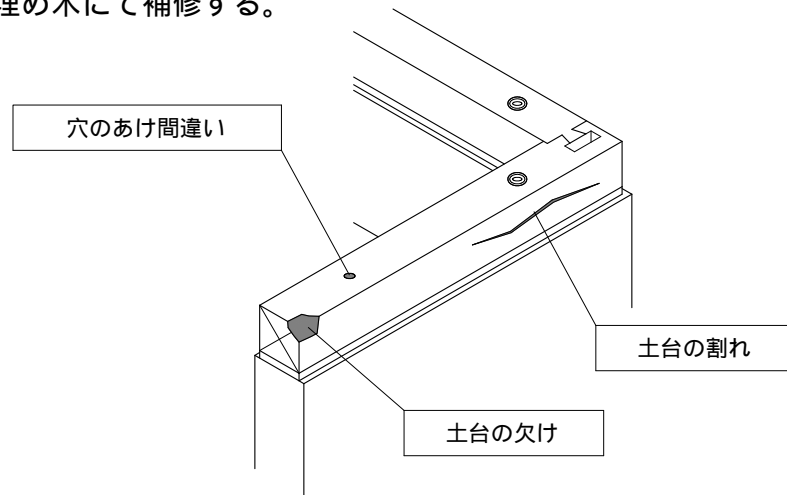


E-3-2 土台仕口部の施工状態

土台の割れ・欠けを確認する。ただし、乾燥による割れは許容する。
柱脚部等、構造強度の低下や雨水進入の恐れのある欠けは、埋め木・接着剤等で補修する。

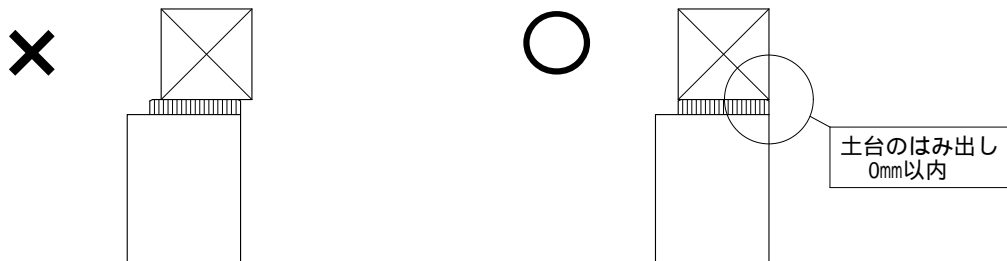
E-3-3 土台穴あけ不備の確認

間違ってあけた穴は、埋め木にて補修する。



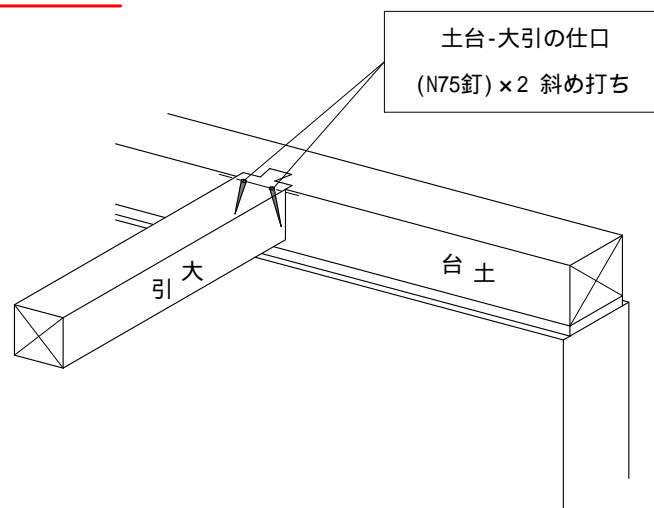
E-3-5 土台ズレの確認

土台は基礎からはみ出ないように施工する。



E-4-4 大引き仕口部の確認

土台-大引きの仕口は、N75釘 × 2 斜め打ち にて留め付ける。



E-6-1 柱直下基礎パッキンの確認

柱の下に基礎パッキンを設置する。

床下断熱(床下通気)の場合は、基礎パッキン
基礎断熱の場合は、天端リスト

E-6-2 アンカーボルト位置基礎パッキンの確認

アンカーボルトの位置に基礎パッキンを設置する。

E-6-3 継手位置基礎パッキンの確認

土台継手の下に基礎パッキンを設置する。

E-6-4 土台端部位置基礎パッキンの確認

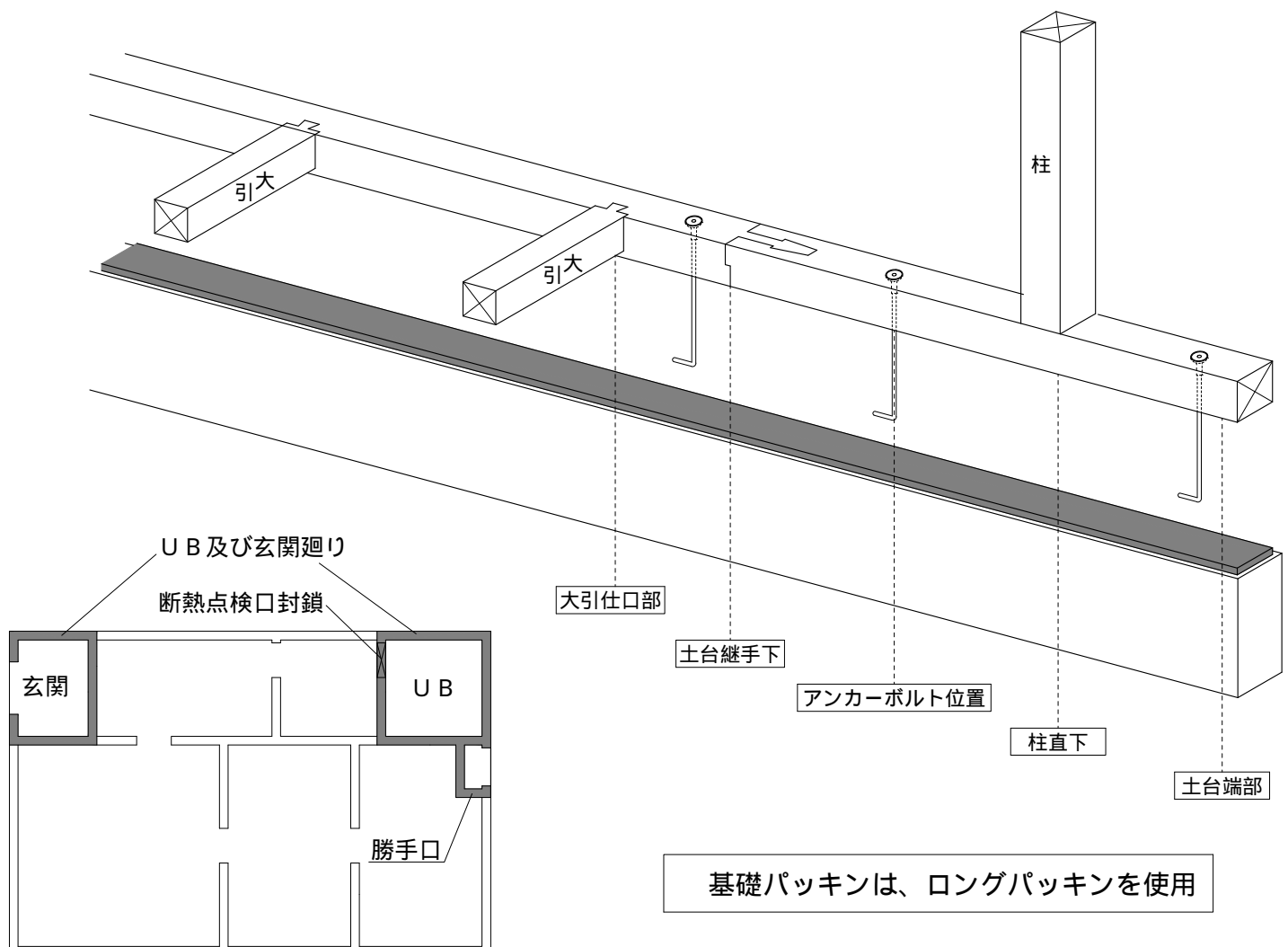
土台の端部に基礎パッキンを設置する。

E-6-5 大引掛かり位置基礎パッキンの確認

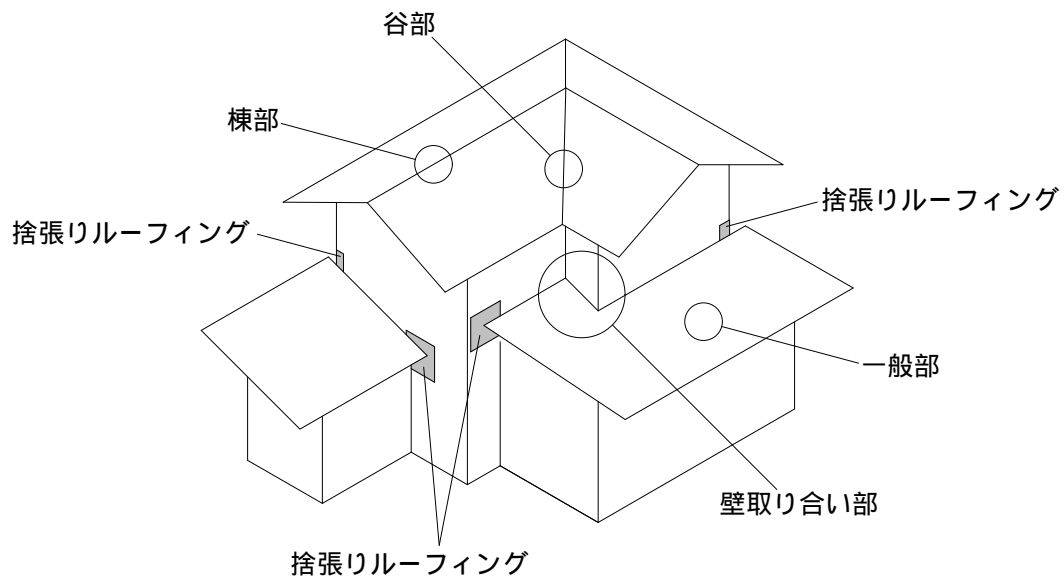
大引が掛かる土台下に基礎パッキンを設置する。

E-6-6 気密パッキンの確認

玄関、勝手口、U B 廻りはすべて気密パッキンを隙間なく施工する。

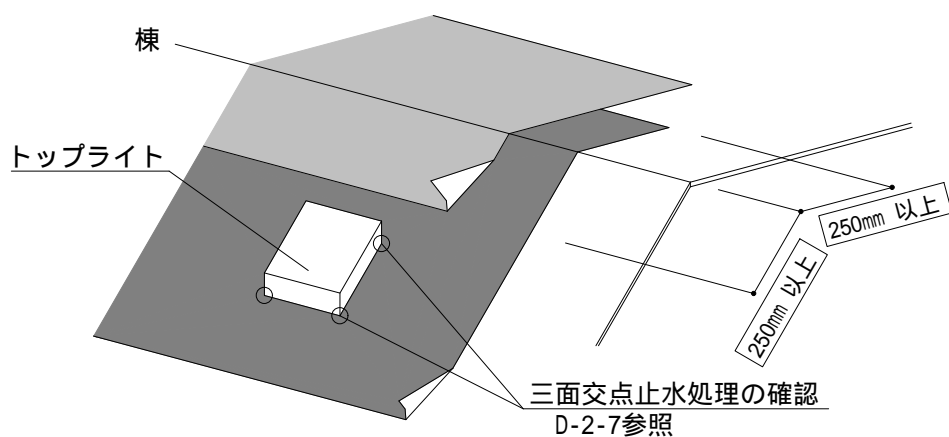


基礎パッキンは、ロングパッキンを使用



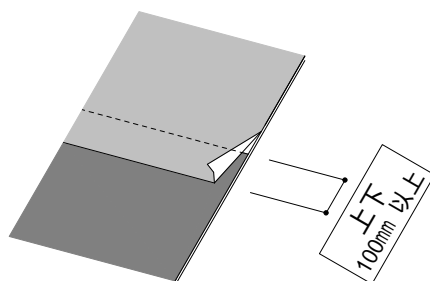
F-2-2 棟部ルーフィング重なり巾の確認

棟部ルーフィング重なり巾：双方に 250mm 以上。(頂部をまたいで2重になるように)



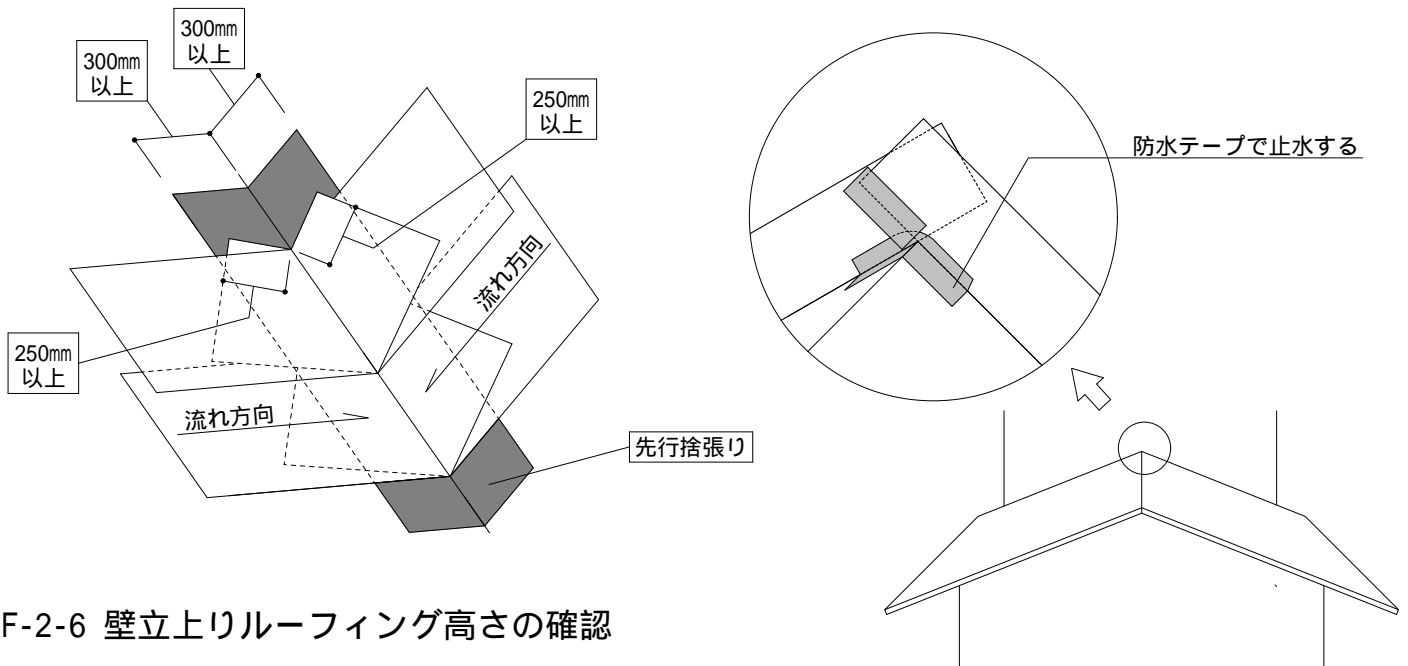
F-2-3 上下重なり巾の確認

一般部上下ルーフィング重なり巾：100mm 以上



F-2-5 谷部ルーフィング重なり巾確認

谷部：幅600mm以上のルーフィングを先行して谷全長の芯に捨張りした後、
両側へそれぞれ250mm以上重ね合わせる。（谷芯をまたいで2重になるように）



F-2-6 壁立上りルーフィング高さの確認

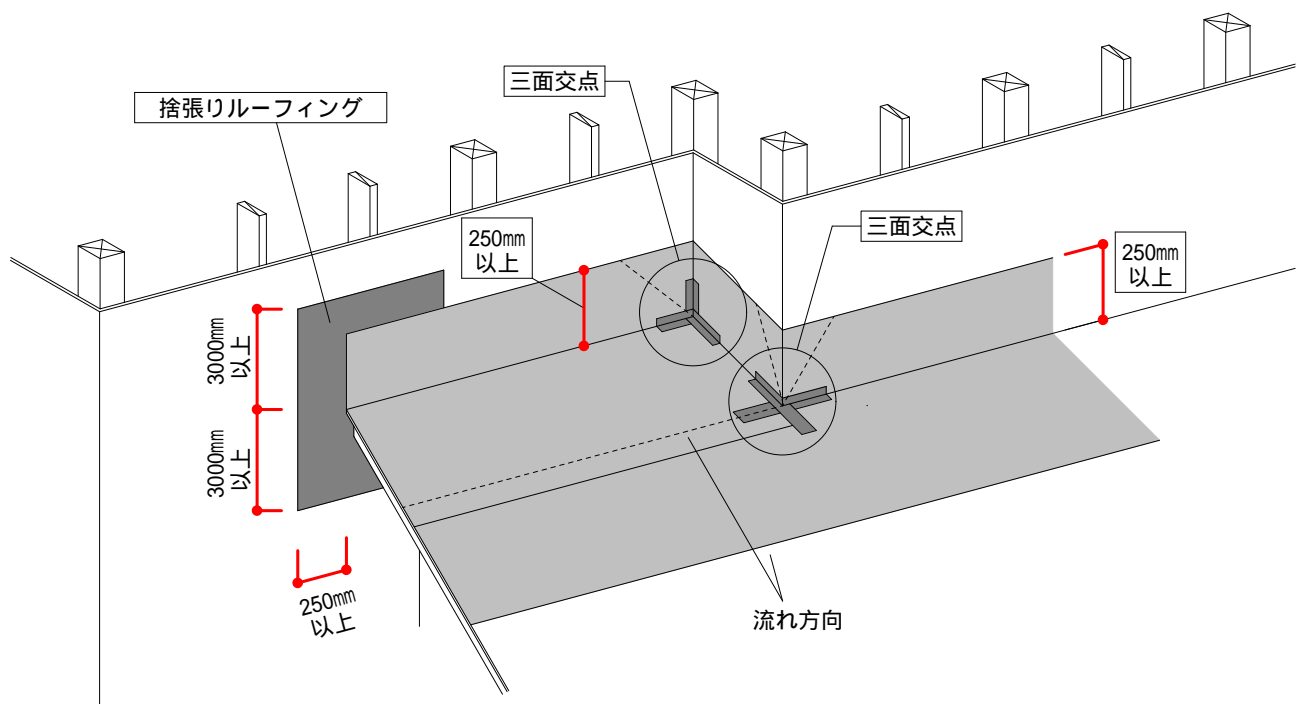
壁立上りルーフィング高さ：250mm 以上

F-2-7 三面交点止水処理の確認

三面交点：出隅・入隅部分でピンホールが発生する箇所は、防水テープで止水処理を行う。

F-2-8 捨張りルーフィングの確認

軒先・けらばとの取り合い部には、先行して捨張りを行う。



G-1-1 サッシ検査前の事前準備

準備する図面

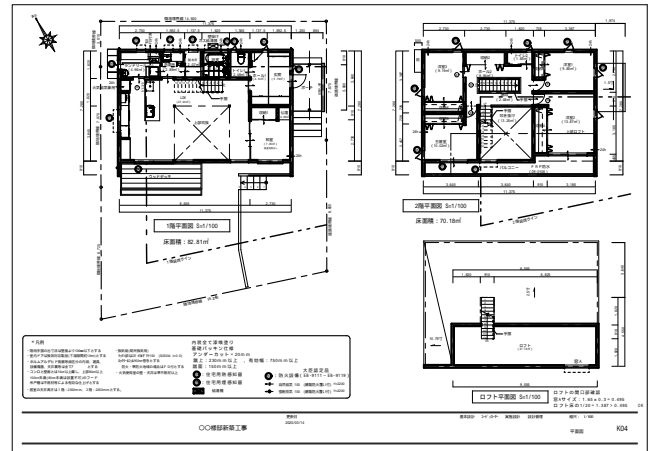
確認申請時の平面図

確認申請時の立面図

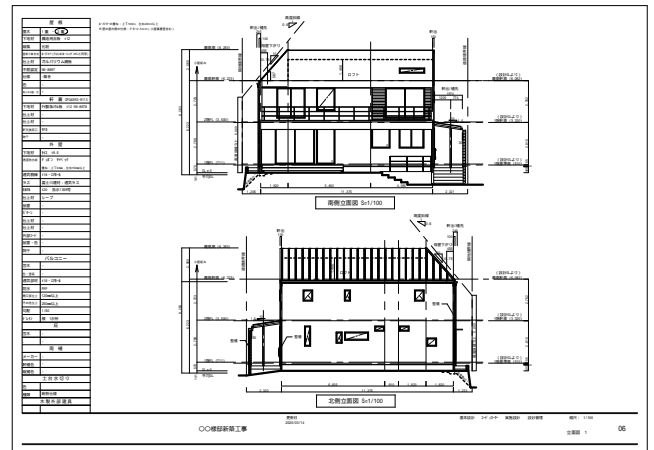
平面詳細図

外部建具仕様図面

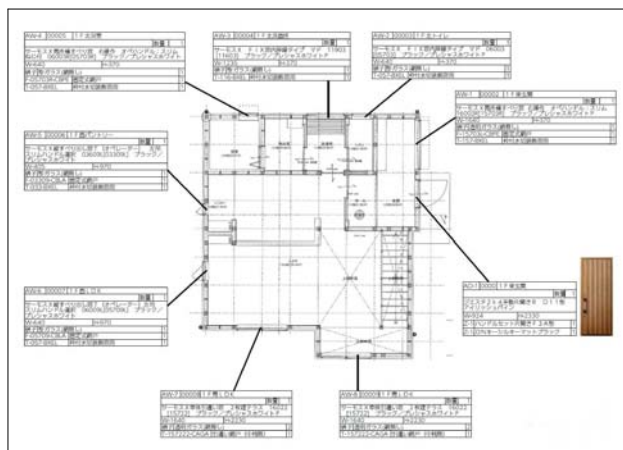
確認申請時の平面図



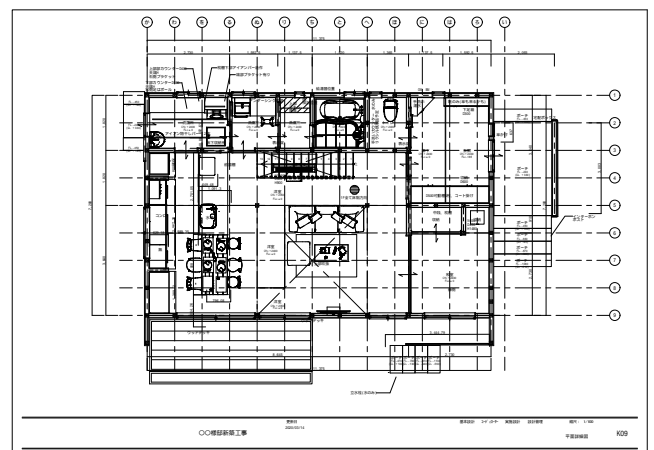
確認申請時の立面図



外部建具仕様図面



平面詳細図



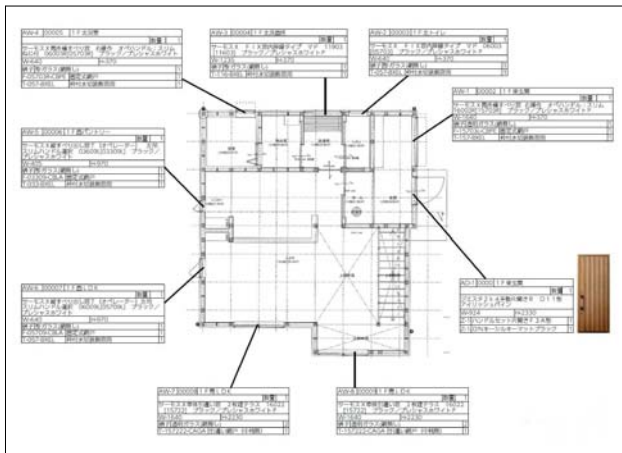
G-1-2 サッシの確認

確認申請時の防火指定を確認する。

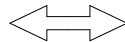
確認申請時の平面図と外部建具仕様図面を見比べて、確認申請時に防火指定されているサッシが外部建具仕様図面でも防火対応されているサッシかどうか確認をする。

防火指定されている個所を非防火サッシが設置されてしまうと、是正する工事が大がかりになってしまうケースが多いので、特に注意しましょう。

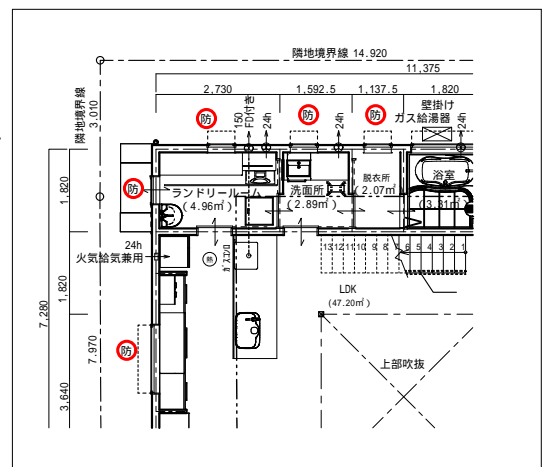
外部建具仕様図面



シャッターの有無や
防火指定の有無を
見比べる

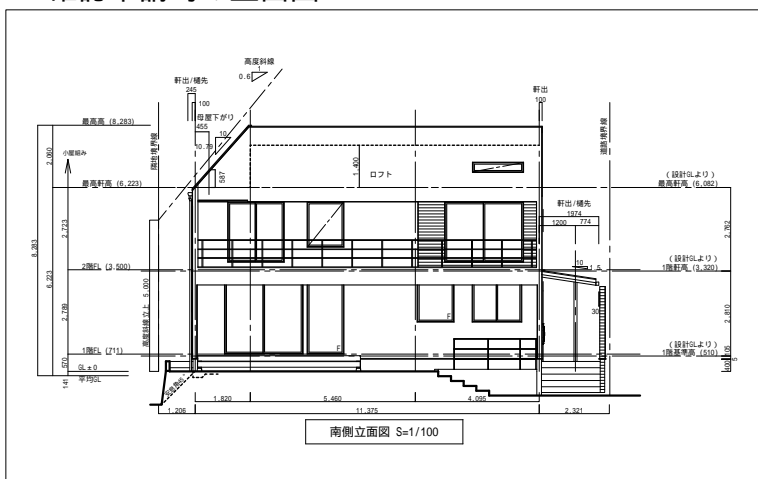


赤丸は防火指定されているサッシ



シャッターの有無や
防火指定の有無を
見比べる

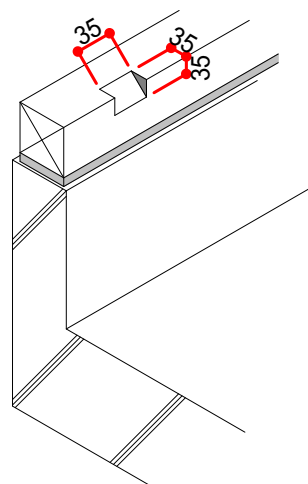
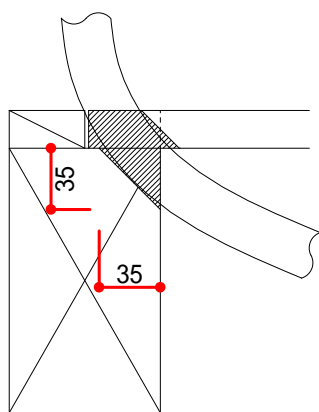
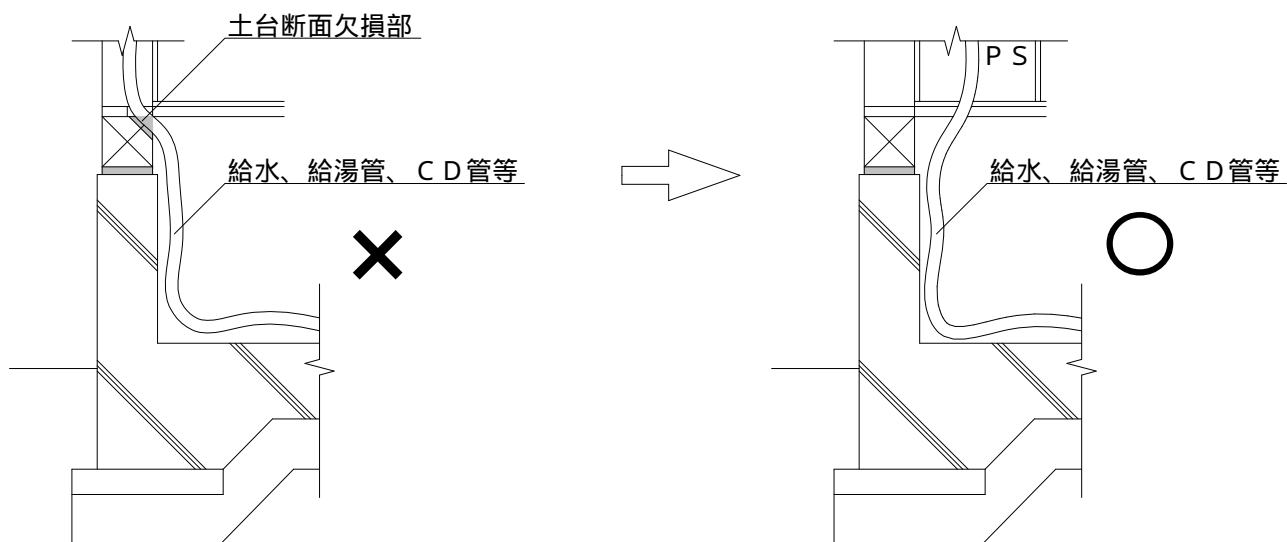
確認申請時の立面図



もし、外部建具仕様図面において確認申請時の防火指定やシャッターの有無で相違がある場合は設計者又は工事監理者に確認をとる。

欠損

- ・柱の欠損は断面積の1/3未満としそれ以上欠きとる場合は担当者と協議の上必要な補強を行う。
- ・設備配管は柱貫通、梁・横架材貫通を避けパイプスペースなど設備配管専用の空間及び取付方法を検討する。
やむを得ず梁・横架材を貫通する場合は横架材幅・高さ方向に35mm以内、切断高さは35mm以内とし連続して設けないこと。



梁の側面に穴を開ける場合は次の基準とします。

柱

梁成：D

60mm以上

80mm以上

配管穴

穴径の5倍以上離す
(6か所まで)

穴開け可能範囲

400以上

400以上

柱

梁成 D	最大孔径
300mm	70mm以下
240mm	60mm以下
210mm	50mm以下
180mm	40mm以下

柱

梁

300以上

配管孔 100

80

140

80

L / 5

L / 5

L / 5

L / 5

L / 5

梁スパン : L

400

400

300

10

30

100

30

10

30

30

80

80

梁

N75釘

配管孔 100

75

75

75

75

75

75

75

75

30

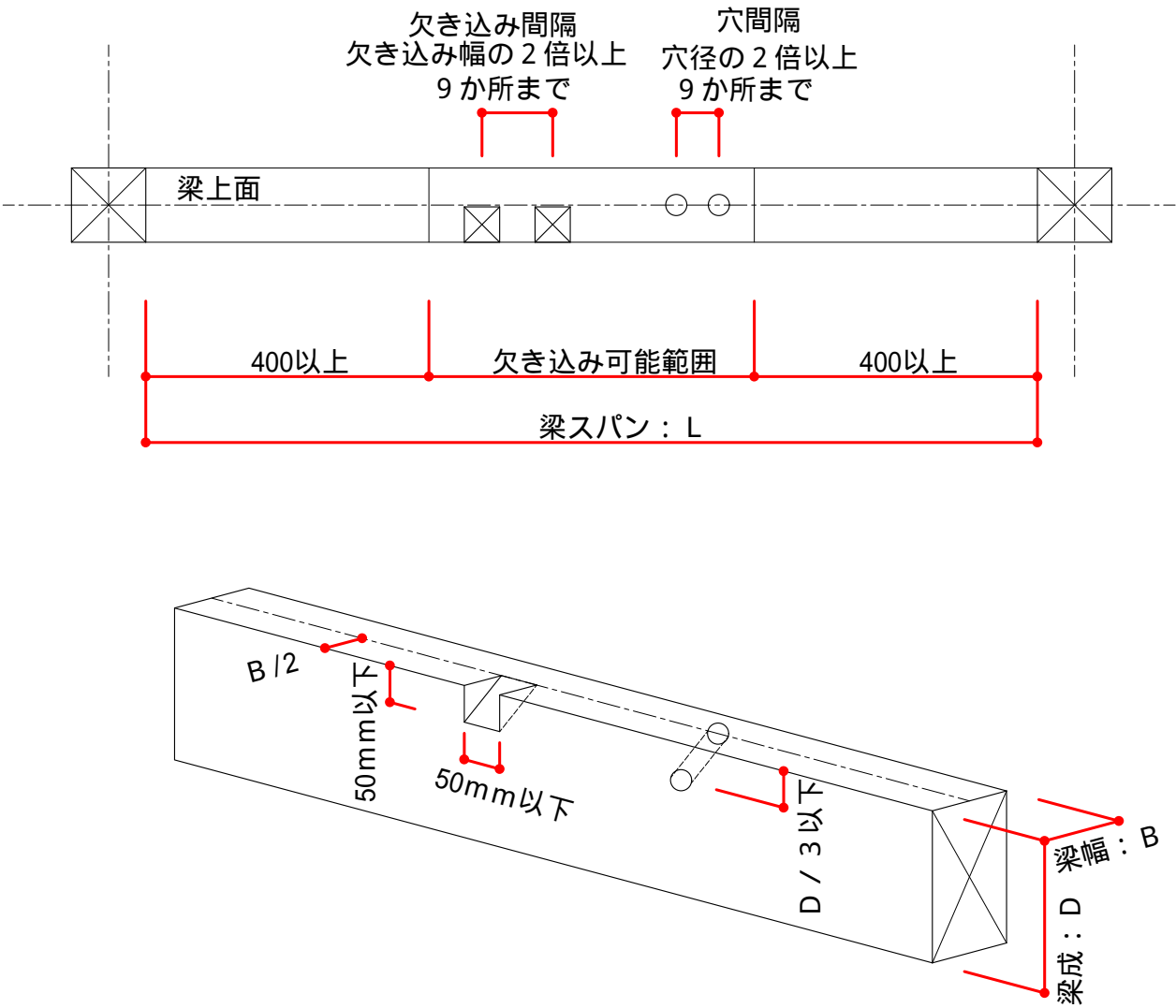
30

梁のサイズ	梁成300以上
孔のサイズ	70 を超え100以下 (VP100は不可)
開口範囲	スパンの1/5以内、 2/5または4/5の位置 各範囲 1 か所 (合計 2 か所まで)
補強方法	構造用合板 24mm 片面 釘: CN75@千鳥打ち 木工用ボンドを併用すること

梁の上部 60 mm と下部 80 mm の範囲は構造上特に大きな力が働く場所なので絶対に穴をあけないようにしてください。

I-1-1 梁貫通の確認

梁の上面の欠き込みについて
 梁の上面に欠き込みを設ける場合は次の基準とします。



間柱欠きを除き、梁の下面の欠き込みは禁止です。

K-2-1 防水シートの施工状態

原則横張りとし、下から張り上げ、継ぎ目部分は、300mm間隔以下でタッカー留めをする。

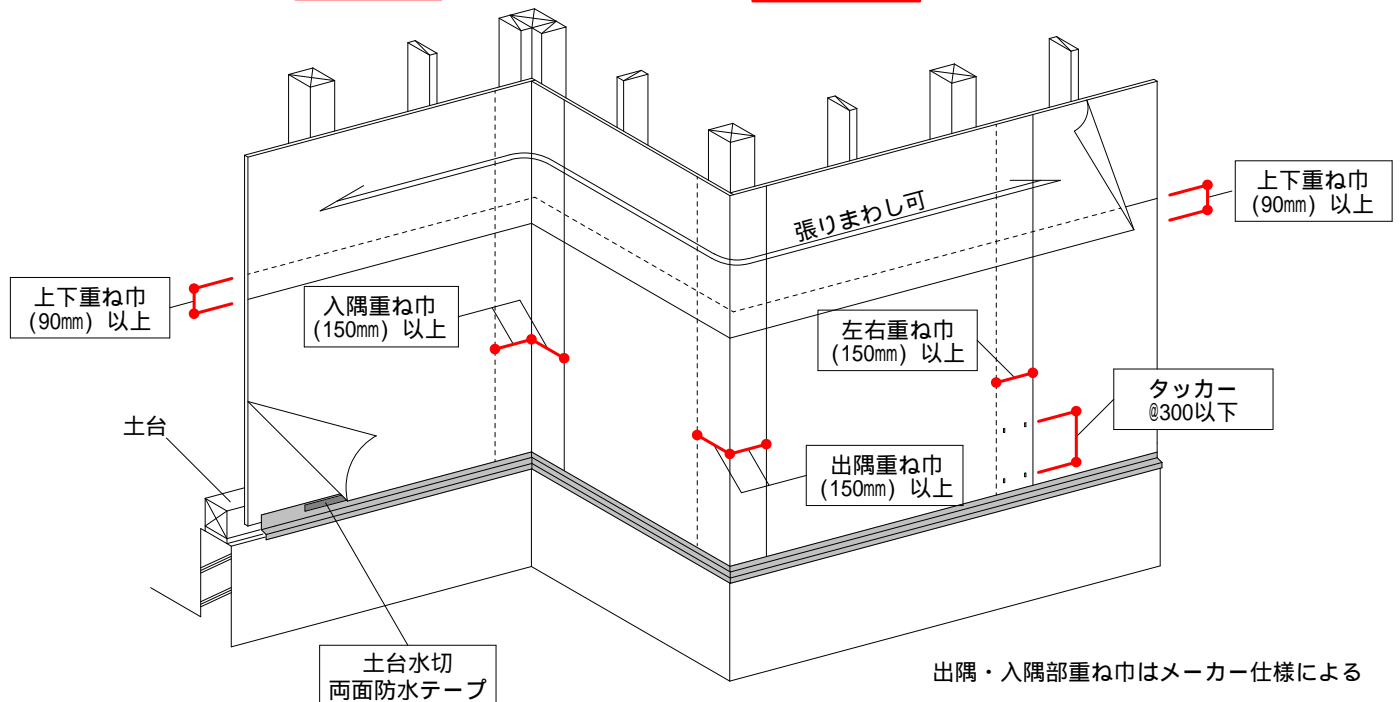
土台水切り部分では、シートを水切の上にかぶせて両面防水テープで留める。

K-2-2 防水シート上下重ね巾の確認

上下重ね巾は、90mm 以上 とする。

K-2-3 防水シート左右重ね巾の確認

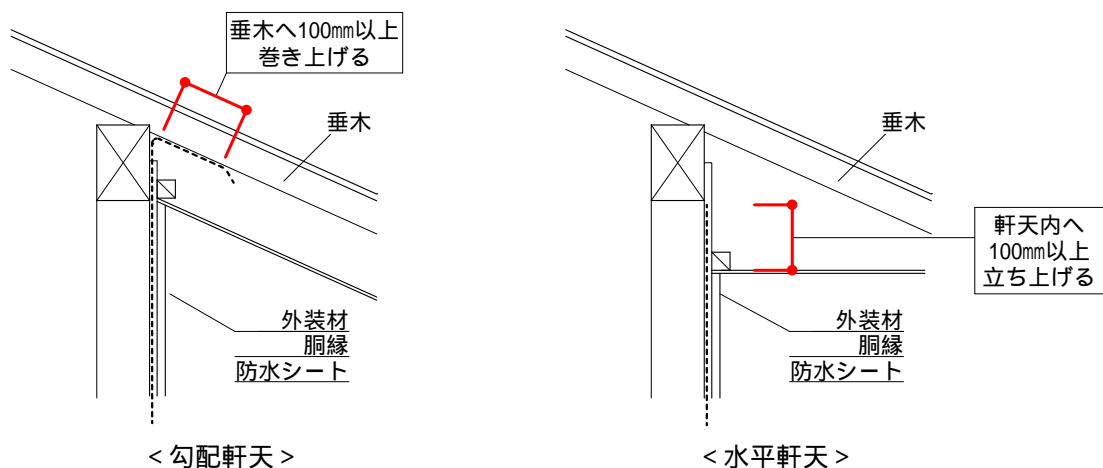
左右重ね巾は、150mm 以上 出隅入隅は、双方に 150mm 以上 とする。



K-2-4 防水シート軒裏の施工状態

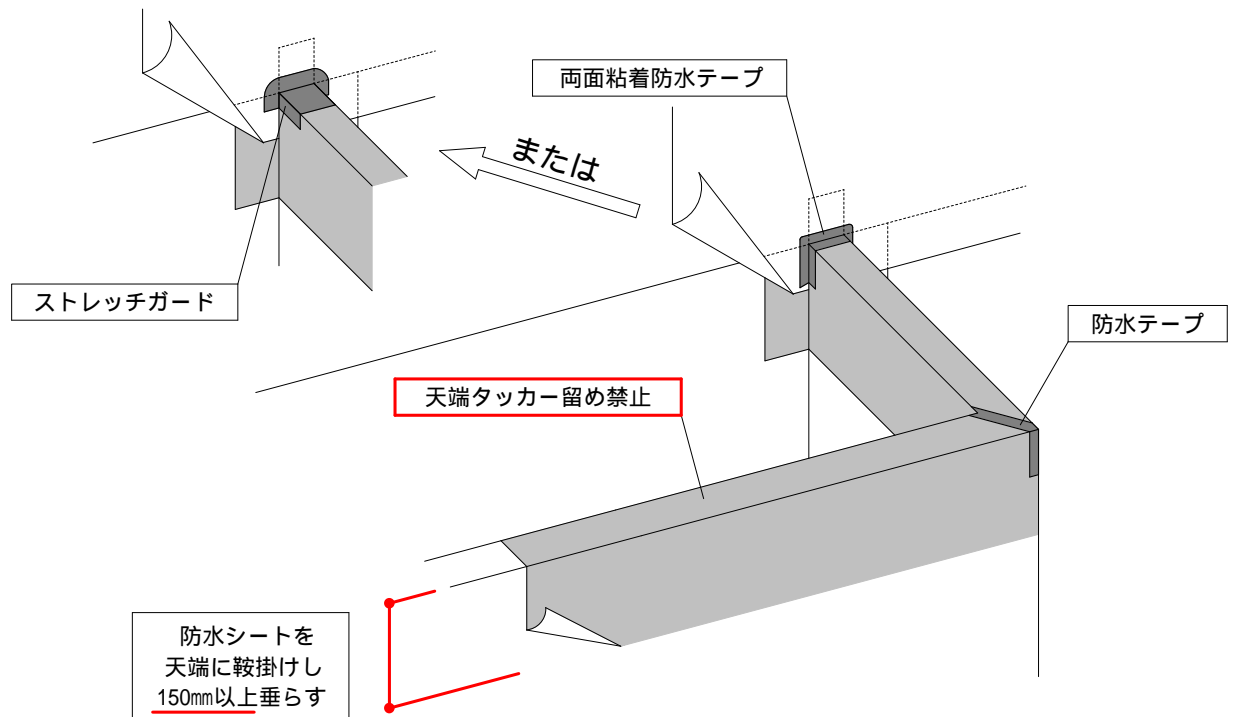
軒天が水平の場合は、軒天内へ 100mm 以上防水シートを立ち上げる。

軒天が勾配の場合は、垂木へ 100mm 以上防水シートを巻き上げる。



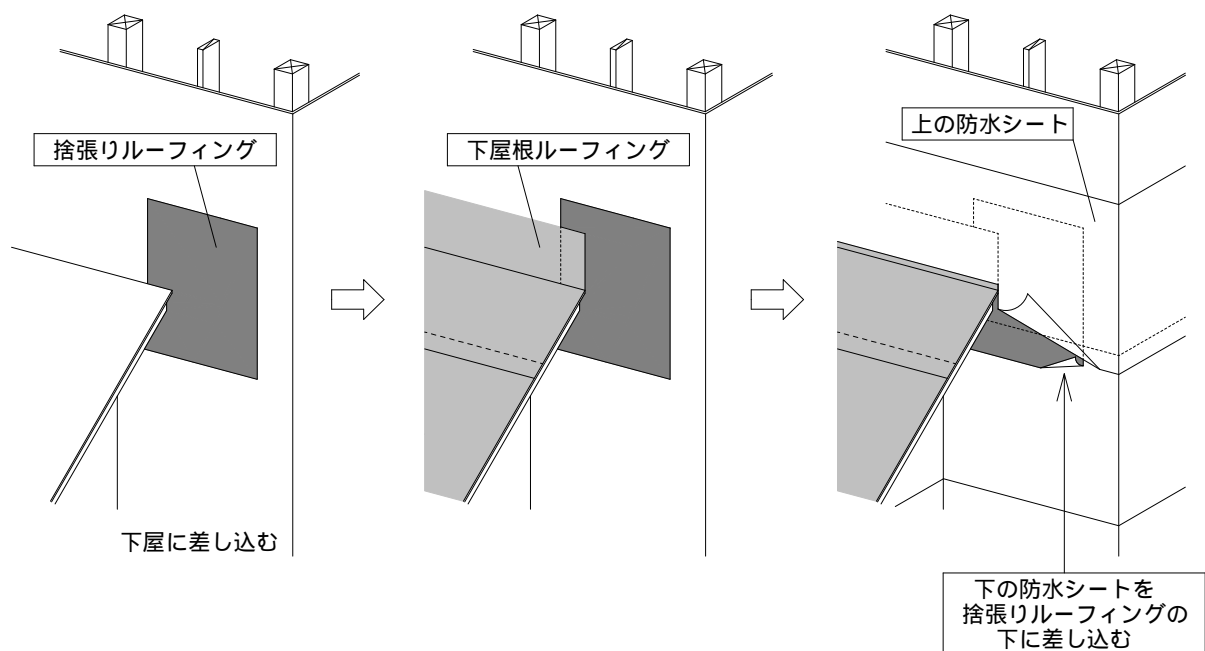
K-2-5 笠木等三面交点の確認

バルコニー等、笠木部分の止水処理は下図の通りとする。



K-2-6 捨張りルーフィング重ね順の確認

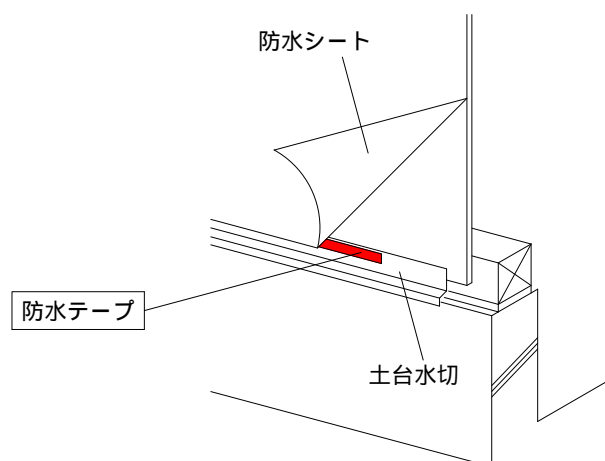
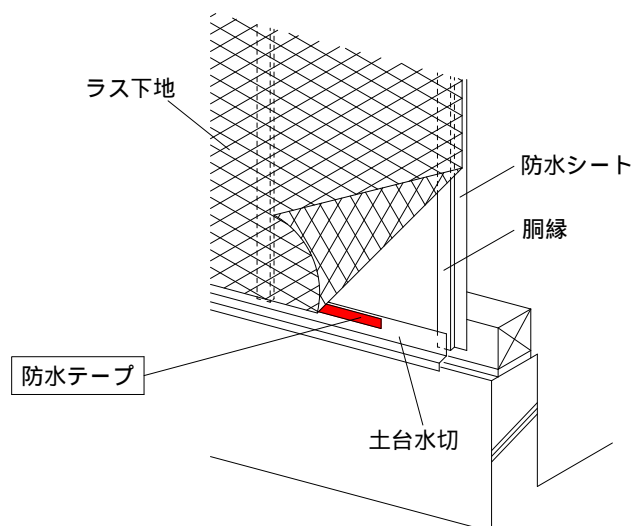
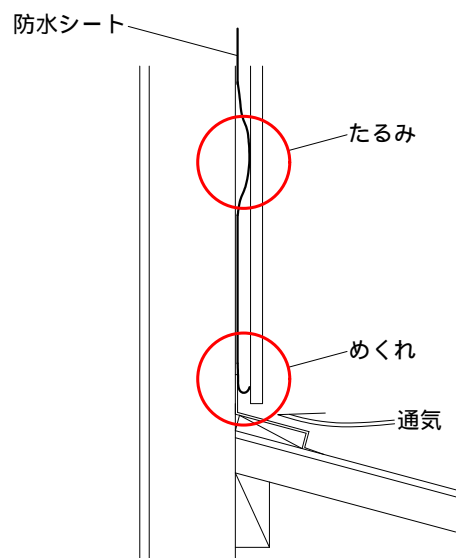
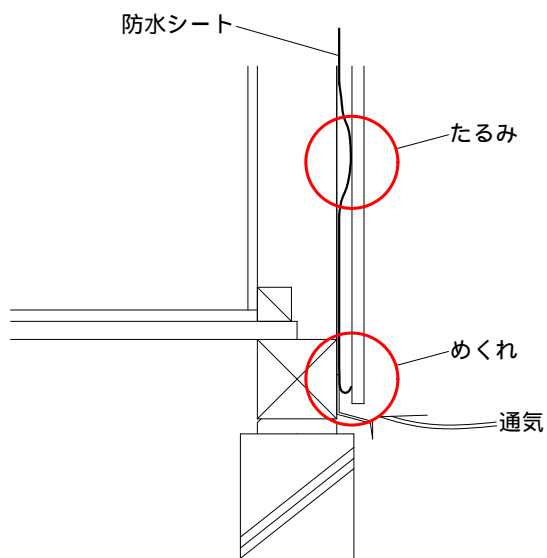
下屋どまりの部の防水シート及びルーフィングの張り順は、
捨張りルーフィング 下屋根ルーフィング 壁防水シート とする。



L-2-4 各所水切り通気空間の確認

防水シートは、通気を妨げないよう、「めくれ」や「たるみ」に注意すること。

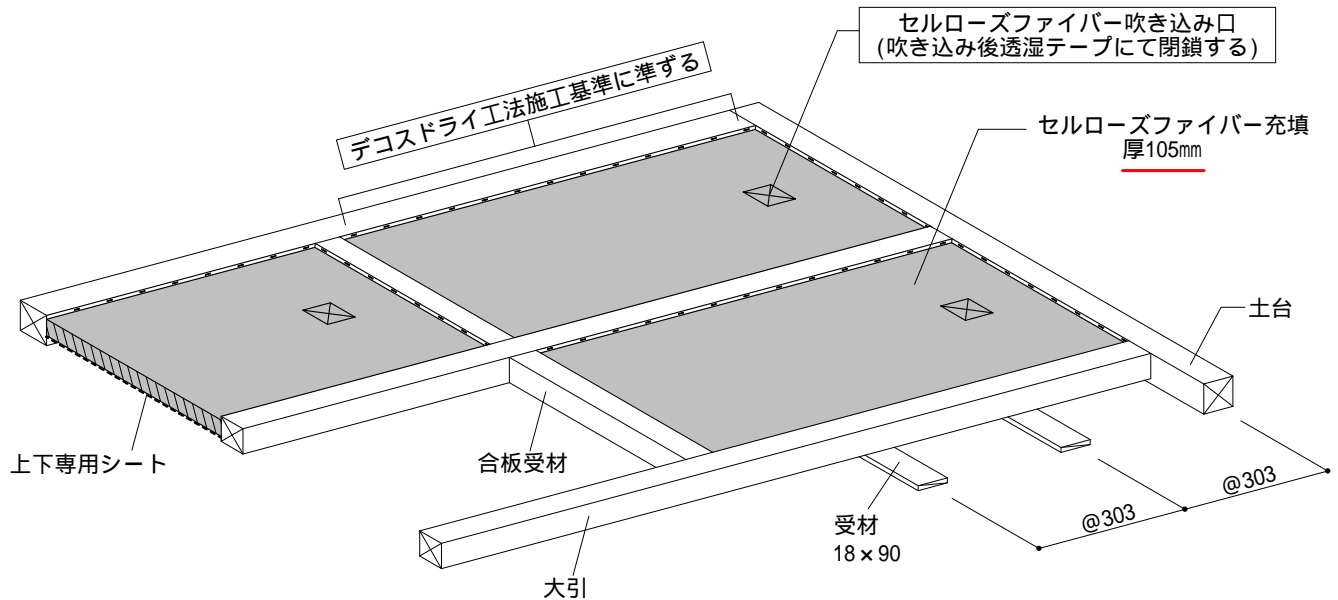
土台水切りや下屋の押え部分は、防水シート端部を防水テープで確実に留め付ける。



M-8-3 床断熱材施工状態の確認

床断熱材は、セルローズファイバー 厚105mm 使用する。

専用シートを上下に設置し吹き込み口を設けてセルローズファイバーを充填する。
充填後、偏りや沈下の無いことを確認し、透湿テープにて吹き込み口をふさぐ。



M-4-1 屋根断熱材仕様の確認

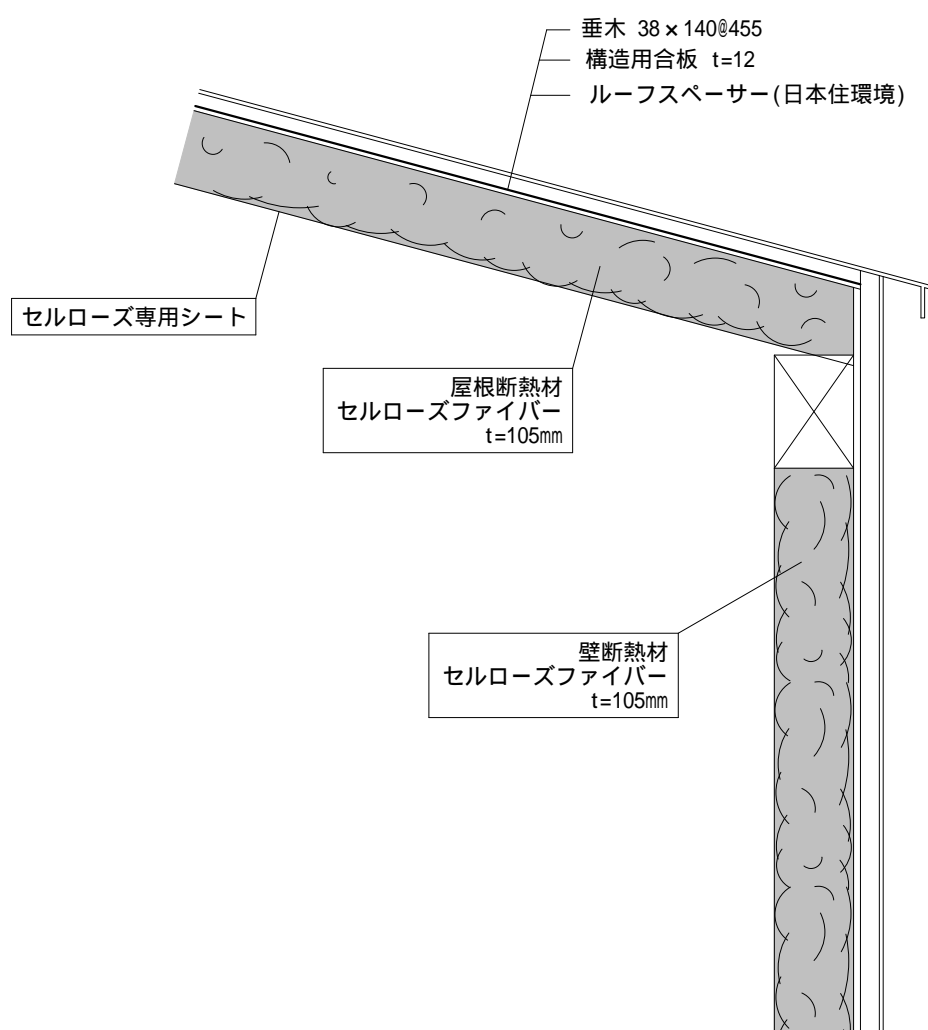
屋根断熱材は、セルローズファイバーを使用する。

M-4-2 屋根断熱材厚さの確認

セルローズファイバーの吹き込み厚さは、105mm とする。

M-4-3 屋根断熱材の施工状態

セルローズ専用シートを部屋内側に貼り付けた後、セルローズファイバーを吹き込み施工する。

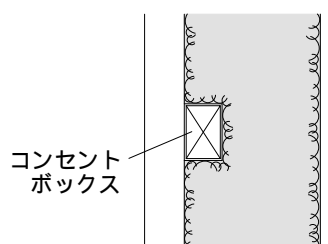
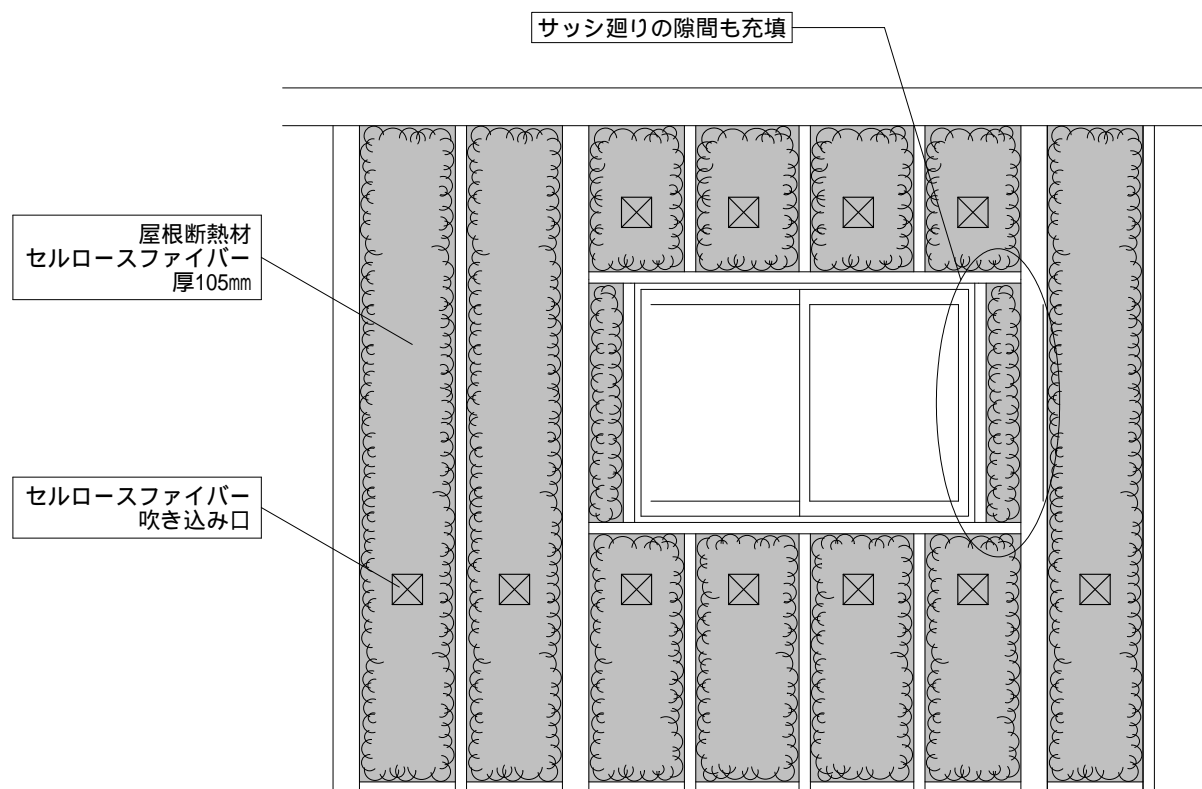


0-2-3 壁断熱材の施工状態

壁断熱材は、セルローズファイバー 厚105mm 充填とする。
 内張り専用シートを柱・梁の見込み面に緩みの無いように貼り付ける。
 専用施工機にてよりむらの無いよう均一にセルローズファイバーを吹き込む。

0-2-4 サッシ廻り断熱材の施工状態

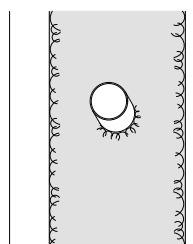
サッシ廻りにできる 10mm を超える 小さな隙間にもデコス専用断熱材を確実に充填する。



< コンセント部分 >

コンセントボックス部分に隙間ができないように充填する

先行して配管・配線をする



< ダクト部分 >

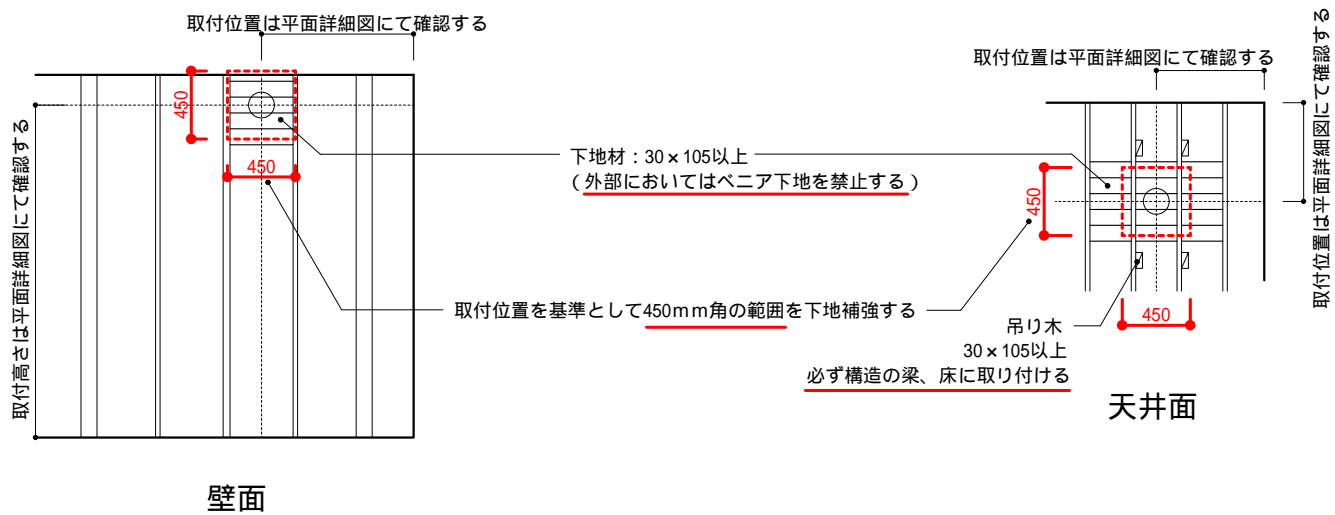
ダクト部分に隙間ができないように充填する

先行して配管をする

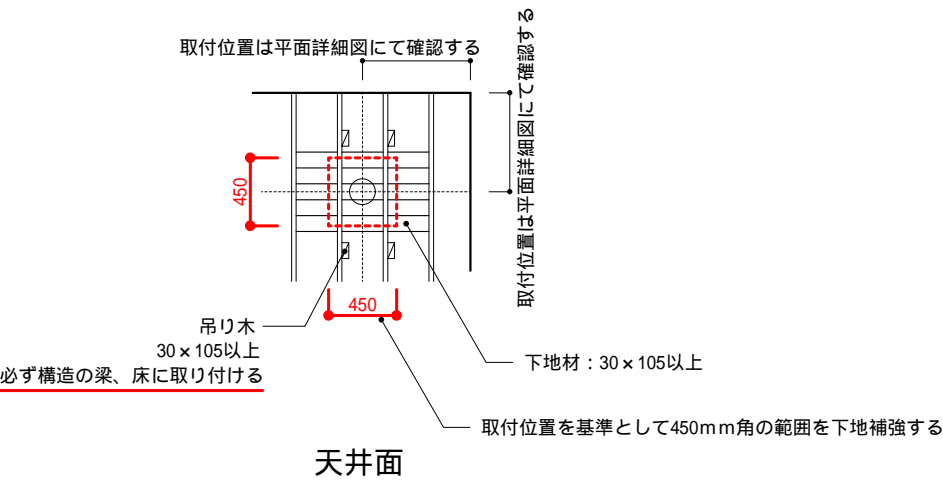
N-1-3 物干し下地の確認

内部物干しの下地を確認する。

物干しの位置は平面詳細図にて確認し、450mmの範囲まで補強をする。



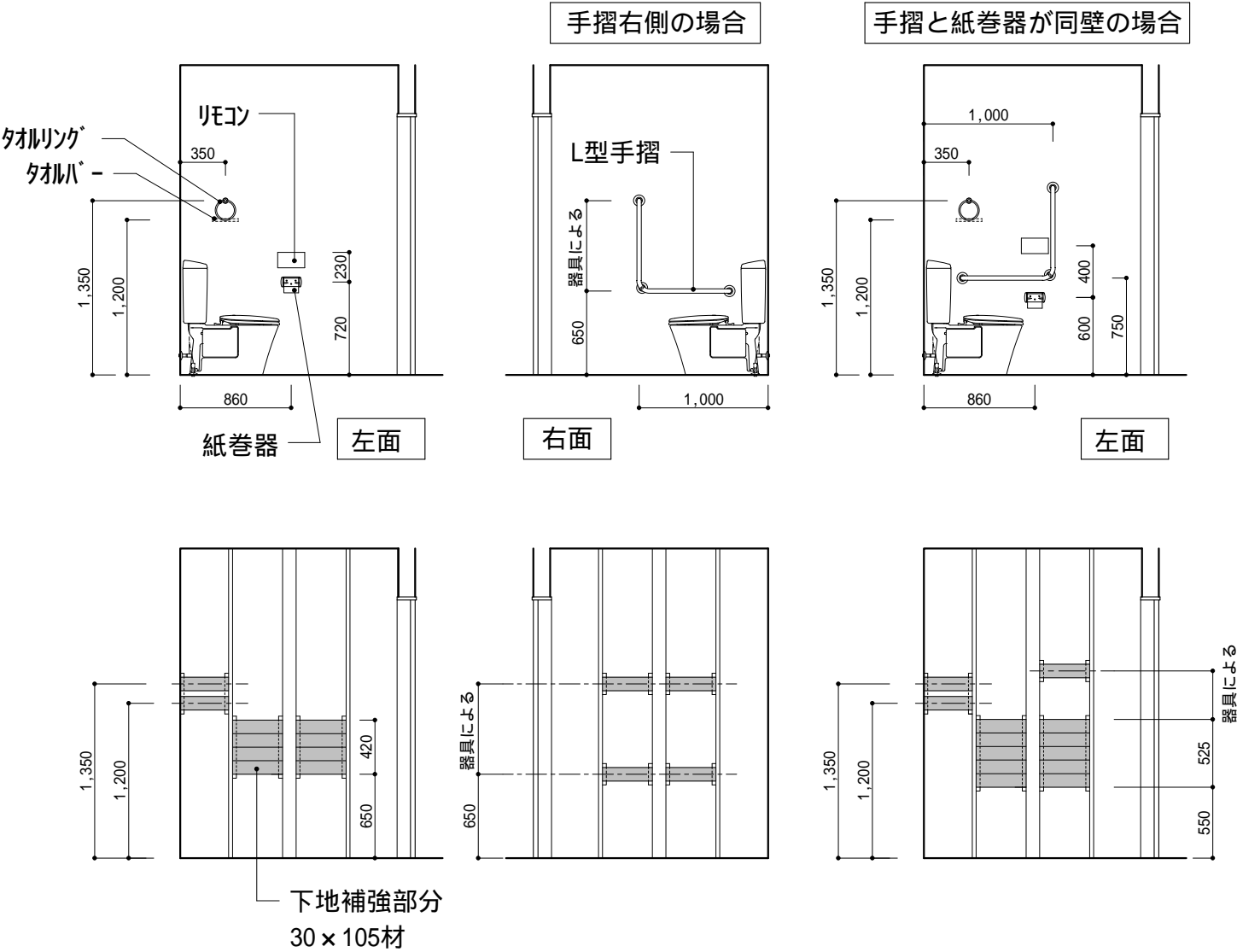
外部物干しの下地を確認する。



N-1-7 トイレ廻り備品下地の確認

トイレ廻り備品の下地を確認する。

下図を参考に補強用下地材の取付を行うが、取付ける器具の固定位置をよく確認する事。

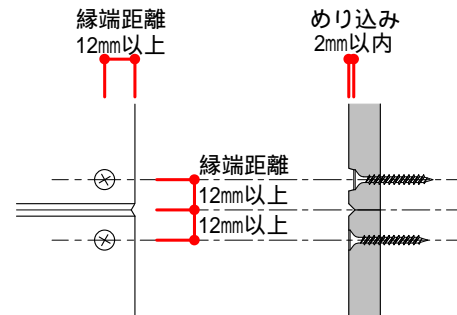


P-2-3 壁ボードの施工状態

ボード切断面は、テーパー処理を施す。

ビスは、 $L = 32\text{mm}$ 以上とし、
PB耐力壁とする場合は、認定品を使用する。

ビス打ち込みの縁端距離(へりあき)は、
 12mm 以上とし、ビスのめり込みは、 2mm 以内とする。



P-2-4 壁ボード張り方の確認

プasterボードは、 12.5mm 厚の 3×8 版($910\text{mm} \times 2420\text{mm}$)又は 3×9 版($910\text{mm} \times 2730\text{mm}$)を使用、
不陸や段差が生じないように張り付ける。

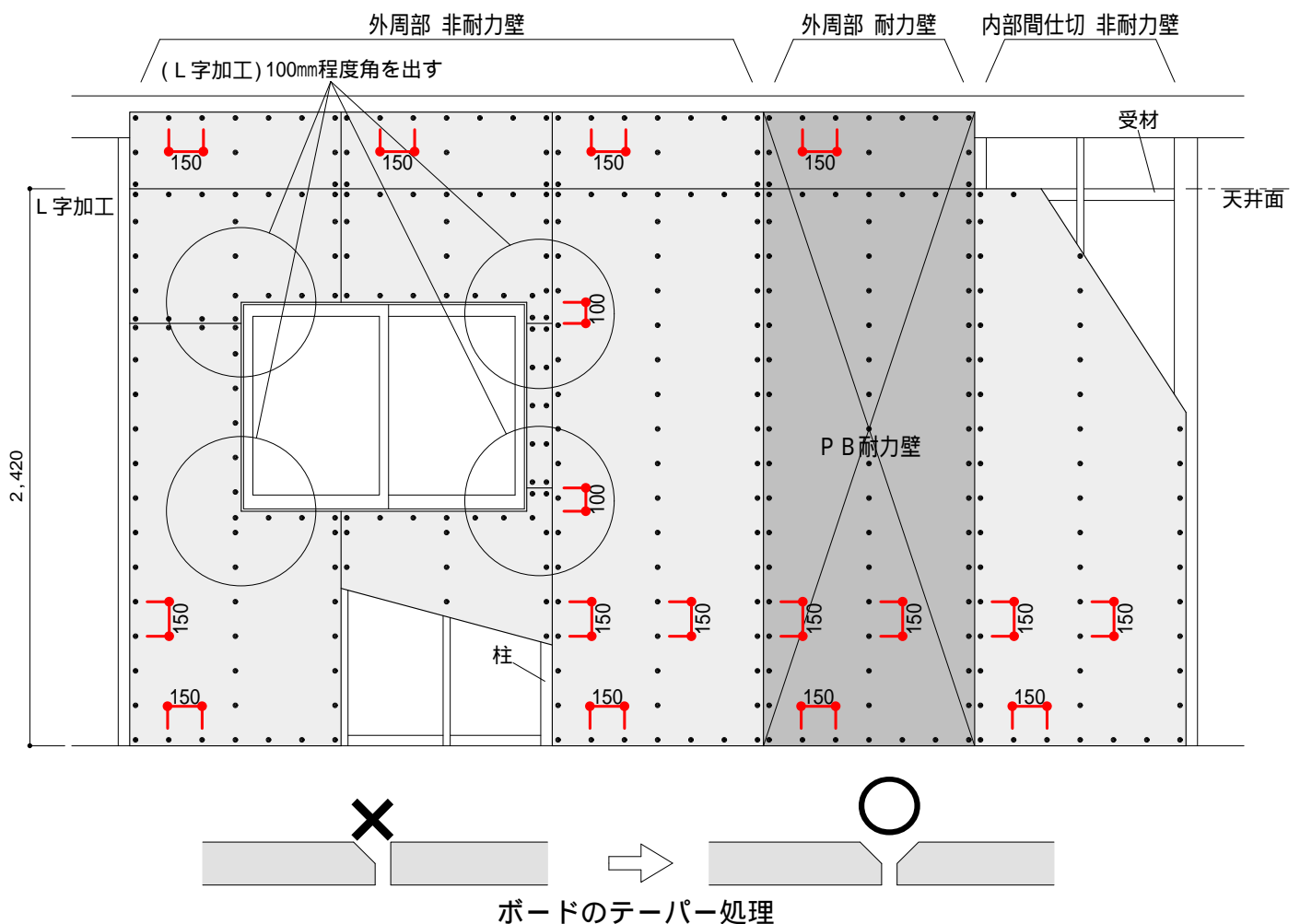
開口部まわりのボードは、原則としてL字またはコ字加工をして張り付ける。

P-2-5 壁ボード外側ビスピッチの確認

外側ビスピッチは、PB耐力壁とする場合は、 150mm 以内 とする。

P-2-6 壁ボード内側ビスピッチの確認

内側ビスピッチは、PB耐力壁とする場合は、 150mm 以内 とする。

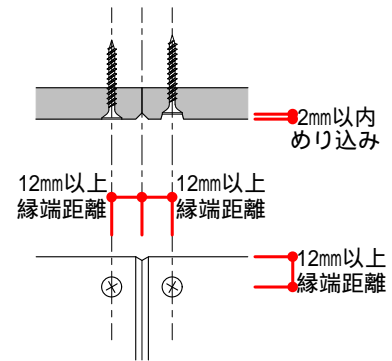


P-3-3 天井ボードの施工状態

ボード切断面は、テーパ処理を施す。

ビスは、 $L = 32\text{mm}$ 以上とする。

ビス打ち込みの縁端距離(へりあき)は、 12mm 以上とし、ビスのめり込みは、 2mm 以内とする。



P-3-4 天井ボード張り方の確認

プラスターボードは、 12.5mm 厚を使用し、ボードの長手を野縁に対して直交させ、千鳥貼りとする。

野縁は、 303mm 間隔で配置しする。

野縁は原則として継がない。どうしても継ぎ手をつける場合は、同材で挟み込みビス留め固定する。継ぎ手位置は乱に配置する。

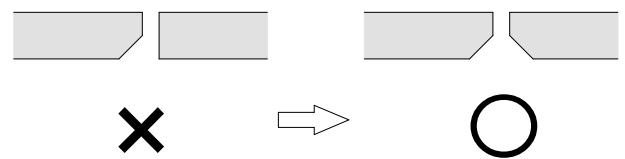
野縁受は、 910mm 間隔で配置し、野縁との交差部に 910mm 間隔で吊木を取り付ける。

P-3-5 天井ボード外側ビスピッチの確認

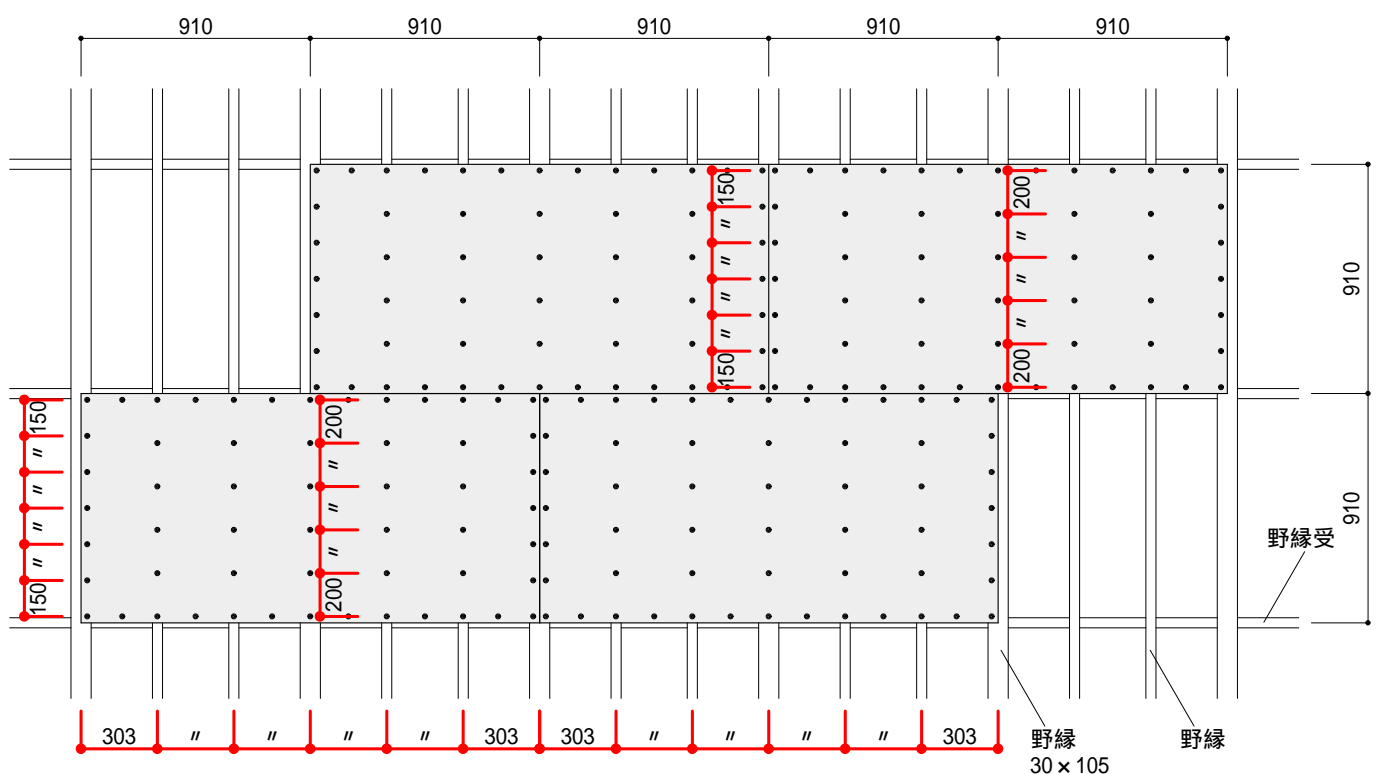
外側ビスピッチは、 150mm 以内とする。

P-3-6 天井ボード内側ビスピッチの確認

内側ビスピッチは、 200mm 以内とする。

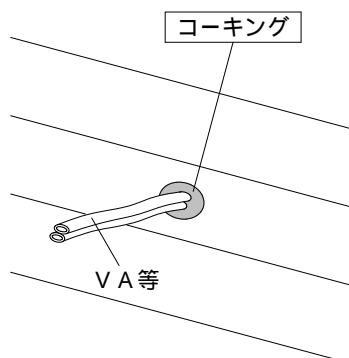


ボードのテーパ処理



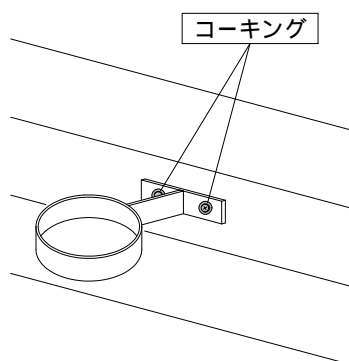
Q-6-2 設備貫通部止水処理の確認

電気配管等貫通部は、コーキングにより止水処理を行う。



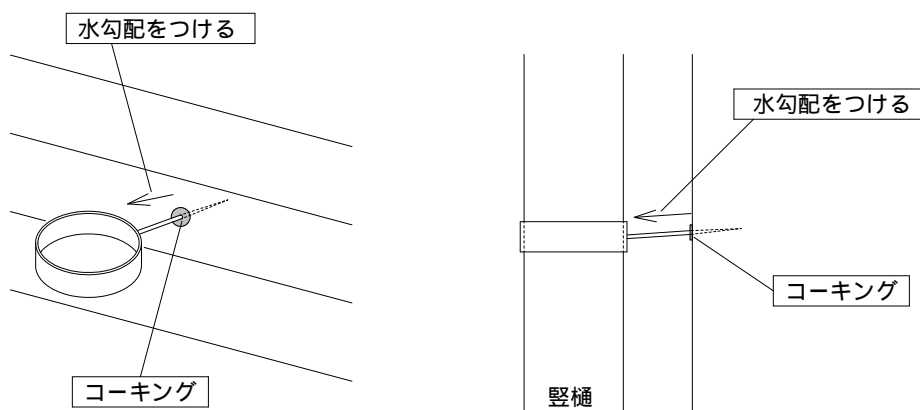
Q-6-3 外装ビス頭止水処理の確認

外壁完成後に施工する樋金物等のビス頭には、コーキング処理を行う。



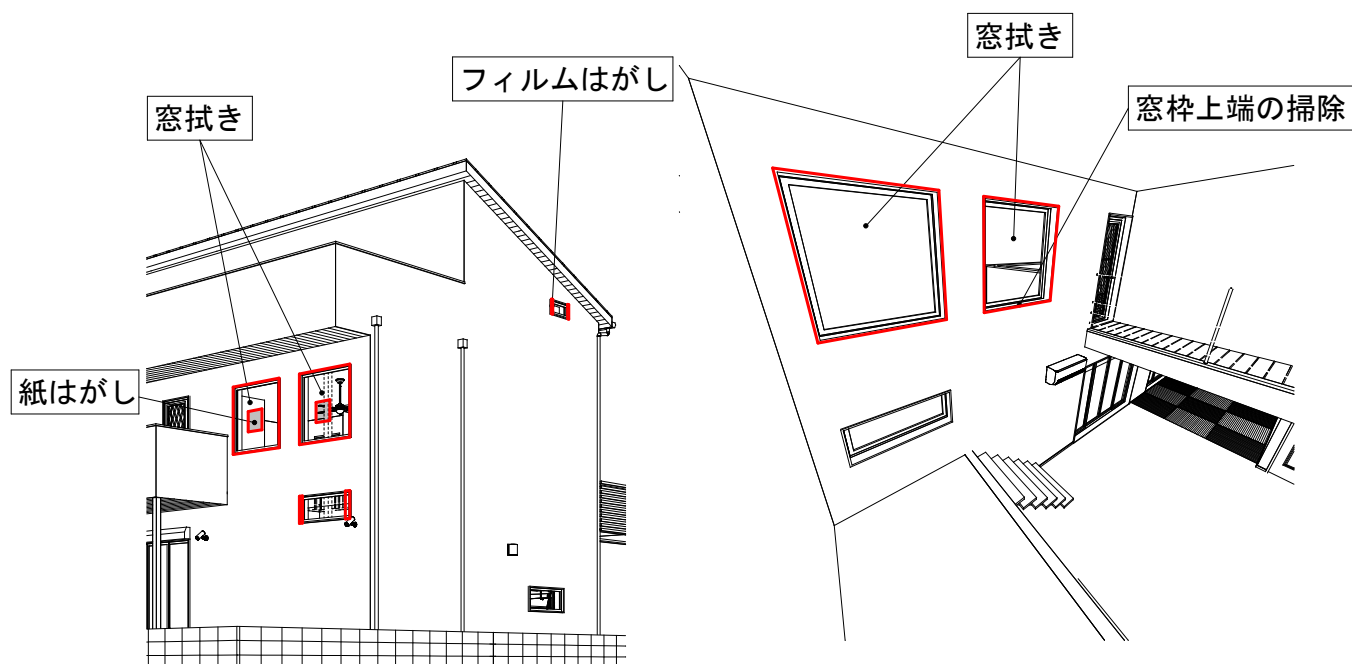
Q-6-4 樋足止水処理の確認

打込み式の樋足は、樋側に水勾配をとり、コーキング処理を行う。



Q-6-5 足場バラシ前点検

●吹抜けの窓拭き



※外部足場が無いと拭き掃除が困難な吹抜け部の窓の掃除は、足場が撤去される前に済ませましょう。また、窓枠上端の掃除も同時に済ませる。

●オーバーフロー管の塗装

剥がれ・割れ・クラック

ピンホール

バルコニーの清掃が済んでいるか？

大屋根に残材がないか？

サッシに養生テープのり
・シーラーが残っていないか？

下屋根に残材がないか？

基礎部分が仕上がっているか？

